
S と S の反発

RYUN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SとSの反発

【Nコード】

N1936J

【作者名】

RYUN

【あらすじ】

夜の繁華街を、何気なく歩いていた。そして裏道に入ったとき、か弱い美少女が男に襲われそうになっているのを見て、私はその男を追い払う。女ながらも強気で男っ気のある（自覚済み）私は、その美少女に微小の憧れを抱きつつ…

(前書き)

ぐだぐだです：突っ込みたいところがあるかもしれませんがorz
あ、SとSの反発というのは、まあ磁石みたいなものです↑

夜の繁華街をぶらついていった。特に目的もなく、ただこの目のチカチカする道を歩いていた。

とうとう目が限界だと脳に訴え、私は裏道の方へ入っていった。

「やめて下さいっ…！」

本当にあるんだ、こんなの。声を上げたのは、可愛らしい女の子。女の子が、男に裏地に連れ込まれたようだ。

女の子は、私がここに来た途端私の存在に気づき、私を見て助けを求めた。ということは。助けろってこと？

でも、いかにもか弱そうだし…いっか。助けてあげよう。

なんて、暗くてよく見えないくせに勝手に判断。そして男の腕を掴んだ。

「何してんの？オニイサン」

ひとまず、微笑んであげた。

——サービス終了。

思いつきり、男の股間を蹴ってやった。男は、声にならない悲鳴をあげて去っていった。

「…シヨボ男。女に負けるような男が女裏道連れじゃんねえよ」

言いたいことを呟き、女の子に目を移した。
なるほど、襲われるだけのことはある。美少女、そして可愛い。私

は、不覚にもその子に見とれてしまった。
そして気を取り直し、女の子に話し掛けた。

「大丈夫？」

「…はい…」

「そう。じゃあ、気をつけてね。あ、繁華街まで一緒に行く？それとも、家まで送…」

「あのさあ。あんたも女でしょ？」

「はっ？」

……。さっきまでの可愛くか弱い姿はどこへ…
声も低くなり、それより一番気になったことは…

さっきまで長かった髪の毛が、短くなっている。ショート？

「女が男を送るなんて前代未聞。俺送るよ」

ニコッと笑った顔は、やっぱり可愛かったと思う。でも、「男」とか「俺」とか言った！！つまり…女装でもしていたのだろうか？

「聞こえてる？」

「うひゃっ」

耳元で言うから…変な声を出してしまった。

「な…ななな…んで…カツラ…お、女物の服…」

「あ…罰ゲームだよ」

罰ゲーム…私は、それを聞いてもほえ…と意味不明な声しか出せない

かった。

ふと、疑問点がよぎった。

「でも…それなら、さつき男に襲われかけてた時…振り払えたんじゃない…」

そう言うのと、彼女…いや、彼は、ああ…とわざとらしく言った。そして、私を真っ直ぐにみて言った。

「あんたがいたから。あんたに構ってほしかったから」

言葉が出なかった。

どういう意味だろう。なんて、そんなことばかりがぐるぐると頭の中で回る。

夜の繁華街は相変わらず派手で、輝いていて…なんて、関係ないものばかりが思い浮かぶ。

「あんたが裏道に入ってきたとき、俺と目え合ったでしょ？あんたの顔が好みだったから、どんな反応するかなーって思ってた。仕掛けてみちゃった」

「みちゃった」じゃないだろ…なんて突っ込みも言えず、ただだんまりとしていた。

「最初はさあ…ちょっと遊びのつもりだったんだよね。けど、あんた男っ気満載。強気だし、美人。だからね、俺あんたに惚れちゃった？的な」

さつきから、「しっちゃった」多いな、なんて思いつつ。今私の脳に存在するのは、彼だけだった。

そして、その美少年は私にどんどん近づいてくる。

あ、ヤバ。

心臓が…ヤバい。

「俺、あんたみたいな強い女を服従させたくないんだよね…でことで、俺の女になって。」

そこは普通、同意を求めるために疑問系だろ。と、こんな状況でも突っ込みを入れたくなる。けど…彼の美しく妖しい微笑みからは逃げられなかった。

しかし、拒みに拒みまくった。

「い…いやです。大体、私のこと何も知らないくせに…」

「ん？なんか言った？梅桃女学院2年A組中村凜サン？」

「なっ…なんで知って…っ」

うろたえる私を嘲笑しやがった。初対面だけど、殴ってやりたい。

「さあね？さ、知ってるからもういいでしょ。いい加減俺をなぐさ」

「ぎゃー！言うなっ！それ以上言うなー！！それに、私はあんたなんか知らない！」

「栗原学園1年C組竹林光。凜の学校の隣の…男子校じゃん」

堂々と呼び捨てしたね、コイツ。

「はっ！？年下！？…じゃなくてっ！そういう知る、じゃないのっ！とにかく、付き合うとか無理っ！」

私がそこで大袈裟に溜息をついてみると、彼が私の顎を掴んで彼の

方に向かせた。

不覚にも、彼の瞳に吸い込まれそうになった。

「じゃあ、凜を振り向かせる。だから、俺のこと見て？」

その時の顔がとても切なげに見えたから、私は思わず「わかった」と返してしまった。

そうして見ている内に、やがて彼を好きになり。想いを告げたときに、えらそうに「そんなに好きなんだ？」と言われたから不意打ちでまわし蹴りしてやった。

：円満に付き合えるのは、もうちょっと先のようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1936j/>

SとSの反発

2010年10月10日04時55分発行